

「俺が『合コンに行ってきたなよ』って言ったら、本当に行った  
だろ」

「んっ、あ♡」

「……俺がああの夜、会いにきてなかったら、他の男に抱かれて  
いたかもしれないんだよな。こんなふうに」

「ああ♡」

鏡に映る神原くんの瞳は、とろけるように熱く、同時にひど  
く飢えていた。

意地悪く私を責め立てながら、その指先は私の敏感な場所のすぐ近くを、焦らすように何度も行き来している。

「……っ、神原くん、だめ♡ 鏡の前で、そんな……っ♡」

「ダメじゃない。ほら、ちゃんと鏡を見て？ 自分の身体が、俺に触られてどんなふうになってるか、よく見なよ」

顎を強い力で固定され、鏡の中の、熱を帯びて潤んでいく自分の瞳と視線が合う。

「本当淫乱だな。俺じゃなくてもよかったんじゃない？」

「あ♡ちが……そんなことな、あああ♡」

「無理やりされて興奮するんだもんな」

「っああ♡ 神原くん……っだけなの♡ ああああ♡」

恥ずかしさに身をよじる私を見て、神原くんは満足そうに、  
だけど切なそうに首筋へと唇を寄せた。

「はあ……他の男に取られるかもって思ったら、気が気じゃな  
かった」

私の背中には、神原くんの熱く硬いものがぴったりと当たっている。

「他の男とは話した？」

「……う、うん……話しかけられたら少し……」

「へえ、どんな話したの？」

「ふ、普通の……んっ♡世間話、だよ……あ♡」

「連絡先は？ 聞かれた？」

「……それは、みんな交換することになって……あああ♡」

耳の奥に舌を挿じ込まれる。ぐりぐりと、されて音がダイレクトに伝わってきた。

「け、消すから……っ」

「いいよ、消さなくて」

「んう♡ ああ♡」

神原くんは、嫉妬という性癖に目覚めてしまったようだった。

洗面台の上で、脚を強引に開かれて、秘部が露わになる。  
割れ目を指で開かれて、クリをねつとりと舐められた。

「あああ♡」

ぐちゅ、ぺろぺろ。じゅる。

舐められ、吸われ、どろどろにされる。

「ああ♡ あ♡ あっ♡」

「声、我慢してみよっか」

「っ！」

そんなの無理だってわかっているはずなのに、神原くんは意地悪な笑みを浮かべて、再び秘部を舐め始める。

「ふっ♡ん♡ん♡ん♡」

ぺろぺろぺろ、くちゅくちゅ。

必死に手で口を覆いながら声を我慢する。

「ん♡ん♡ん♡ あああ♡」

ちゅうちゅと思いつき吸われ、私は体がビクビクと震えた。

「あーあ、声出しちゃダメだって言ったのに、抑えられなかつ

たね」

「はあ……っ、だって……っ♡」

「だってじゃない。そんなにお仕置きされたかった？」

「……っ」

「はあ、まったく。じゃあ、立って。前向いて」

私を洗面台の上から下ろすと、鏡の方へ向かせる。

そして……ぱちんッ！

「あっ♡」



ぱちん、ぱちん、ぱちんと、おしりを手のひらで何度も叩かれた。

「あ♡ ああ♡」

「叩かれて感じてんの？ 本当変態だな」

つうつと股の間から、太ももを伝って落ちていく。

興奮しているのだと自覚して、かああっと体が熱くなった。

私、思っていた以上に変態なのかもしれない。

ブブツと洗面台の上に置いたままだった私のスマホが振動する。

一通のメッセージだった。送り主はさつき合コンで知り合った男性だ。

「誰？ 合コンの人？」

「う、うん」

「へえ。返事しなよ」

命令の圧を感じて、私はスマホを手に取り、メッセージを開く。

今日は楽しかったということと、今度また会わないかという誘いだった。

「気に入られたみたいだね」

「んあ♡ あ、あああ♡」

神原くんの長い指が私の中に挿れられる。

ぐちゅ、ぐちゅ。弱いところを、トントンと指で刺激されて、快楽に浸ってしまう。

「ほら、返さない」と

「はあ……あ♡ あう♡」

私は、今日はありがとうございますという文章を打ったものの続きが思い浮かばない。

ふたりで会うのは、彼氏がいるのだからいけない。だけど、合コンに参加したくせに彼氏がいるなんていうのも違う気がした。

なので、当たり障りなく“今度みんなでまたご飯でも行きましょう”と打っておくことにした。

「ああああっ♡」

後ろから熱く硬いものが押し入ってきて、私はスマホを落としてしまう。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ。パンパンパン！

「あ♡ ああ♡ あ♡ あ♡」

鏡には嫉妬に染まった神原くんの陰しい表情が映る。

それを見て、私はぞくぞくした。

「あっ♡ ああん♡ や♡ だめえ♡」

激しく突きながら、耳を舐ってくる。

「はあ……っ、はあ」

熱い吐息がかかり、神原くんが強い力で私を後ろから抱きしめてきた。

「また、会うの？」

「あああ♡ か、神原くんが……嫌なら、あ♡ 会わな……あ

ああ♡」

「じゃあ、俺が会っていいって言ったら会うんだ？」

パンパンパンパンツ！　ぐちゅぐちゅぐちゅ。

「ああ♡　ああ♡　ああ♡　ああ♡」

神原くんに会っていいと言われたら、私はきっと会うだろう。

相手には申し訳ないけれど、特別な感情はない。

だけど、この嫉妬でぐちゃぐちゃになった神原くんの姿を見ることができるのなら。